

## 中国の口承文芸研究書について

飯倉 照平

## 一、来日した諸氏の最近の著作

中国の口承文芸研究の現状については、すでに本誌でも、来日した賈芝、馬学良、王汝瀾、陶陽の諸氏の講演要旨によって、最近数年間の活況が紹介されている。これらの諸氏の講演を聞かれた方々もあると思うので、その後の諸氏の仕事と消息についてふれておくことにしたい。(敬称はすべて省略させていただいた。)

賈芝は、以前の評論集『民間文学論集』(作家出版社、一九六三年)につづき、それ以後の文章をまとめた『新園集』(中国民間文芸出版社、一九八一年)を刊行したが、これには一九八〇年十二月に本学会の代表団が訪中したさいのシンポジウムでの報告も収められている。中心的な任務から

は退いたと聞いたが、現在でも中国民間文芸研究会の副主席(主席は鍾敬文、副主席は九人)で、一九八六年の賀状には武漢にある中南民族学院教授の肩書きもあった。

おなじく中国民間文芸研究会の副主席で中央民族学院の教授である馬学良は、今且との共編で、『苗族史詩』(中国民間文芸出版社、一九八三年)を刊行している。また一九八二年三月に来日したさいの講演「中国少数民族の民間文学」を、『民族文学研究』創刊号(一九八三年十一月)に発表している。この『民族文学研究』は、中国社会科学院少数民族文学研究所の編集する季刊誌で、毎号とも充実した内容である。

中国民間文芸研究会の民俗学部副主任の王汝瀾は一九五〇年刊の後藤興善の『民俗学入門』を中国訳して出し(中国民間文芸出版社、一九八四年)、これには大藤時彦の

「民俗学および民俗学の領域」(『世界大百科事典』一九七一年版から)と井之口章次の「民俗学の位置」(『民俗学の方法』から)も付載されている。王汝瀾はさらに沖繩の昔話六十八編を訳出した『白鳥姑娘(白鳥処女)』(中国民間文芸出版社、一九八四年)も出している。これは仲井真元楳と伊波南哲の昔話集および遠藤庄治から提供された採集資料集をもとにしたものである。

ついでにいえば、現在の中国では日本の口承文芸あるいは民俗学の研究について強い関心がいだかれてきている。研究の面でもっとも高い水準をもっているのは、中国民間文芸研究会上海分会編『民間文芸集刊』(上海文芸出版社、不定期刊、第一集は一九八一年十一月、第七集が一九八五年六月)と中国民間文芸研究会編『民間文学論壇』(中国民間文芸出版社、はじめ季刊、現在は隔月刊、一九八二年五月創刊)の二つの刊行物であるが、両者とも日本の研究動向の紹介と翻訳が多い。

二、三の例をあげれば、前者の『民間文芸集刊』の第一号には「日本民間故事の編選と研究管窺」、第二号には「柳田国男と

日本民俗学』がある。筆者はともに北京師範大学副教授の張紫農。国立民族学博物館の招きで、一九八五年三月に来日した。東北出身で日本文が読める。『民間文学基本知識』（上海文艺出版社、一九七九年）、『歌謡小史』（福建人民出版社、一九八一年）、『中国民俗』（講習班テキスト、一九八三年）など多方面の著作がある。あとでふれるように、関敬吾『日本の昔ばなし』の翻訳にも関係している。

後者の『民間文学論壇』には、本誌に書かれた大林太良の『世界の民話』と『アジアの民話』の書評が訳載されたり、荒木博彦の『昔話の歴史地理学的研究』や大藤時彦の『昔話研究の方法論』も紹介されている。方法論だけではなく、君島久子の『金沙江竹娘の伝説について』や鈴木健之の『機智人物故事』筆記』などのような個別のテーマをあつかった論文も訳載されている。同誌の編集者であり、日本語を解する朝鮮族出身者として訳者の一人でもある林相泰からは、すぐれた論文を紹介してほしいと、いつも北京で聞かされた。

国学院大学のお世話による日本国際交流

基金の招きで一九八五年の春から夏にかけて来日した遼寧大学の烏丙安教授も、東北のモンゴル族出身で日本語を読める。『民間文学集刊』第四集に「チベット族故事『斑竹姑娘』と日本の『竹取物語』故事の原型研究』といった論文を書いている。烏丙安には『民間文学概論』（春風文艺出版社、一九八〇年）のほか、『民俗語叢話』（上海文艺出版社、一九八三年）、『中国民俗学』（遼寧大学出版社、一九八五年）などの著書もある。東北での昔話の採集や整理にも大きな影響力を持っている。

中国民間文学研究会研究部主任で『民間文学論壇』の副主編である陶陽が、本学会の例会の講演で紹介していた『泰山民間故事大観』（文化艺术出版社、一九八四年）が、徐紀民、呉綿との共編で刊行された。呉綿は、民間会の渉外の仕事をしている、浙江の湖州族出身の趙長工女士の筆名らしい。本書は、同一伝説の数種の異文を並記したり、同一昔話の記録稿と整理稿を対照させて掲載するなど、整理方法を模索する上での意欲的な編集ぶりが見られる。また解放後の中国の口承文学研究では回避されがち

であった道教や仏教の影響の強い神仙伝説をとりあげている点でも注目される。もっともこれは、本書にかぎらず、ここ数年間の刊行物に共通した特長である。浙江省で長く昔話の採集整理にたずさわってきた陳璋君が、本書と前後して『天台山遇仙記』（中国民間文学出版社、一九八四年）のような大冊を編集したのも、漢民族の伝承における神仙伝説の根強さを示しているといえよう。

さらに一九八〇年十二月の本学会代表団の訪中のさいお世話になった北京師範大学の鍾敬文教授は、六十年來の研究の成果を『鍾敬文民間文学論集』（上海文艺出版社、上巻は一九八二年、下巻は近刊）と『民間文学談叢』（湖南人民出版社、一九八一年）にまとめて刊行している。その研究歴については、馬昌儀によって「鍾敬文の民間文学の道をさぐる（その一）」の副題をもつ『求索篇』（『民間文学集刊』第四集）が書きはじめられており、加藤千代も「鍾敬文の日本留学——日中交流の側面から」（『東京国学院大学』『人文学報』一六六号）を書いている。

中華民國以後の口承文芸研究史については、鈴木健之の「中国民俗学・民族学研究史年表Ⅰ（一九一七—一九四九）初稿」(『中国民話の会会報』に連載)が、近刊の同誌

二十八号で第二十六回になり、一九三七年すなわち日中戦争開戦の年までが、あらまし概観できるようになった。鍾敬文の論集の刊行は、その内実を明らかにするために大いに役に立つ。最近ではさらに、おなじ時期の鄭振鐸、顧頡剛、趙景深などの論考が、手に入りやすい形で刊行されるようになった。これらの戦前の仕事と、抗戦期の辺境および根拠地での動きが、解放後の展開と連続して、はじめて一体化した研究史がとらえられることになるだろう。

以上、本学会と多少ともかわりのあった諸氏の動向をとりあげた。このほかに、王松、劉魁立(後出)、譚達先、郎桜、胡振華などの諸氏が来日しているが、紙数も限られているために別の機会にゆずりたい。

## 二、昔話研究の索引と専著

彼我の研究者の交流は、やがてはもつと

実質的な共同研究の端緒をつくりだすことになるだろう。ここでは、その前提となるいくつかの状況についてふれてみたい。

中国の昔話のタイプ・インデックスとして長く使われてきたのは、ドイツ人の中国学者エーバーハルトによって一九三七年に刊行された『Typen chinesischen Volksnaechen (FFC 120)』である。これについては、以前に沢田瑞穂訳『中国の昔話』(三弥井書店、一九七五年)に付された『世間民間文芸通信』第一号の「中国の民話資料について」という小文で言及したことがある。このインデックスは戦前の中国の昔話資料を総括しているが、採集地域が沿海各省に偏在しており、ほぼ漢民族に限定されている。三百余点の文献(うち昔話集と見なしうるものは六十余点)を使い、約三千話が分類の対象となっている。これに対し、アメリカ籍の中国人学者丁乃通によって、一九七八年に刊行された『A Type Index of Chinese Folktales (FFC 223)』は、文化大革命以前の資料をほぼ網羅し、前者とはちがってA-T方式で整理されている。わたしもまだくわしくは検討して

いないが、使われた文献は補遺をふくめて六百をこえて約二倍となった。増加分の大半は昔話集であろうから、話数は数倍にふえたものと思われる。地域や民族のかたよりもかなり是正されたはずである。

ところで、現在わたしたちの手にしうる資料からいえば、文化大革命以後、この数年間に単行本や雑誌に発表された昔話は、それ以前よりも量的にはるかに多く、質的にもすぐれたものがふえてきている。タイプの分布に大きな変動はないとしても、資料分類の上では大幅な改訂が必要となっている。

一九八一年に丁乃通が中国を訪れたこともあって、このインデックスは中国訳されて『中国民間故事類型索引』(春風文芸出版社、一九八三年)として出版された。ただし、例話は代表的なもの一つだけがあげられ、巻末の索引などは省略された。タイプの見出しが中国の物語名に書きかえられているものもある。本書は遼寧大学の研究生(院生)が烏丙安教授の指導のもとに訳出した。別に北京大学の学生による翻訳も完成し、近く出版されるというのである。

戦前に鍾敬文による「中国民間型式」の試みがありながら、解放後はほとんどかえりみられることがなかった。それが今ようやく研究者たちに問題にされはじめたというところであろう。中国社会科学院文学研究所民間文学研究室の劉魁立は、『民間文学論壇』一九八二年創刊号の「世界各国民間故事類型索引述評」で、A Tの由来を語り、エーバーハルトや丁乃蓮のインデックスにも言及し、索引の必要性を力説している。その末尾では、『白族民間故事伝説集』（君島久子訳、三弥井書店、一九八〇年）の編者として知られる李星華女士と、一九五八年や一九六二年にA T索引について話しあったことが回想されている。

現在、中国では口承文芸資料の系統的な整理が計画されており、いずれは中国で独自のタイプ・インデックスが作成されることになるであろう。それまではおたがいに個別の研究をつみかさねていくほかはない。しかし、昔話研究についての専著は、中国ではまだほとんど見られない。解放後の主要な論文を集めた『中国民間文学論文選』（一九四九—一九七九）全三冊（上海文芸

出版社、一九八〇年）にも、昔話を対象としたものはわずか数篇しかない。近年になって相次いで出された「民間文学概論」や「民間文学論集」のたぐいでは、少数民族のものをふくめて、昔話がそれなりの記述をされているが、あまり充実しているとはいえない。

広州の中山大学に長くいて現在は香港に住む譚達先の「中国民間文学理論叢書」（商務印書館香港分館、これまで八冊刊行）には、『中国民間童話研究』（一九八一年）と『中国動物故事研究』（一九八一年）があり、全体を見わたすためには有用であるが、個別の論議には物足りないところが多い。

上海文芸出版社の副社長などをつとめた天鷹（本名は姜彬）の『中国民間故事初探』（上海文芸出版社、一九八一年）は、日本風にいえば書き下ろし評論である。あとがきによると、文化大革命末期の一九七二年冬、心電図に異常があったため幹部学校から家にもどって休養を許されたさい、一年数カ月をついやして書きあげられたものという。解放後の文芸理論の影響に制約されながらも、よく目くばりのきいた概説書と

して、一つの達成を示している。

姜彬は、一九八〇年十二月に本学会代表団が上海を訪れたさい、日本側の講演会の司会をつとめた。『歌謡の手法とその体例を論ず』（上海文化出版社、一九五七年）、『中国古代歌謡散論』（古典文学出版社、一九五七年）、『一九五八年中国民歌運動』（上海文芸出版社、一九五九年。一九七八年に再版）など歌謡に関する著作が多く、最近も『呉歌およびその他を論ず』（上海文芸出版社、一九八五年）を出した。著作には筆名「天鷹」を使うが、論文は本名で発表していることが多い。

一九八四年十一月、中国民間文芸研究会のいわば分野別研究会として、中国楹聯学会、中国歌謡学会、中国故事学会、中国新故事学会が設立された（中国神話学会はそれより早く同年五月に設立されている）。このうち昔話を対象とする中国故事学会の主席が姜彬である。顧問には、鍾敬文、賈芝らのほか、蕭崇素、董均倫、孫劍冰、陳璋君など採集整理者として知られる人々が迎えられている。副主席は烏丙安、劉守華、許鈺、張文、郝蘇民、段宝林、彭維金の七

氏で、こころが実質的な中堅であろう。秘書長は林相泰、祁連休の二氏(以上、『民間文学』一九八四年十二月号による)。

中国故事学会の副主席の一人である劉守華は、武昌(武漢市)にある華中師範学院の副教授。坪田譲治の『日本のむかし話』(偕成社、一九七六年版)から三十一篇をえらんで、『日本文間故事』(陳志泉訳、人民文学出版社、一九七九年)が刊行されたのを読んで、「中日昔話交流略談」(『民間文学』一九八一年二期)を発表し、三十一篇のうち半数の十五、六篇が中国の昔話と類似したものであることを指摘した。わたしたちはそれを、『中国民話の会会報』第二十号に、岡崎由美訳で紹介した。わたしたちにとつてとりわけ目新しい指摘があるわけではなかったが、「中国の研究者によって、このような視点をもつ論文が書かれたことをなによりも重視し」たからである。

そのことが機縁となつて文通がはじまり、北京滞在中の一九八三年十一月、わたしは招かれて慶応大学の中原律子さんとともに武昌で一週間をすごした。氏は一九三五年、湖北省沔陽県の生まれで、華中師範学院を卒業した。日本の文献を読みたくて、日本語をならいじめたところだという。わたしはことわりきれずに、同学院と中南民族学院で「日本と中国の昔話の交流」と題して話をした。(その訳文はのちに民研会の会員にくばられる『民間文学動態』一九八四年四期に掲載された。)

劉守華は、すでに一九五〇年代後半から『民間文学』に書きはじめ、同誌だけでも十篇ほどの昔話をとりあげた論文を発表している。日本との比較では、「中国の『鬪鼠記』と日本の『親捨て山』」(『民間文学』一九八二年四期)のような文章もある。そのほかには、『ジャータカ』、『バンチャ・タントラ』、『大唐西域記』、『アラビヤン・ナイト』などと、それぞれ中国の口承文芸との交流をあつかったものがある。一九八五年八月には、四川民族出版社から『中国民間童話概説』が刊行され、予告によると、一九八六年四月には中国民間文芸出版社から『民間故事の比較研究』が出版されるとあるから、多少のおくれはあつても、その労作を手に行ける日も近いことだろう。

ついでに、日本の昔話の中国での紹介に

ふれておく。中国の口承文芸研究の開拓者の一人である周作人は、すでに一九一二年に書いた「童話研究」という論文で、日本の昔話と中国のそれをひきくらべている。(『児童文学小論』児童書局、一九三二年。)

周作人は、のちに柳田国男の『遠野物語』や佐佐木喜善の『聴耳草紙』を紹介した文章も書いている。そのほか雑誌にのつたものはあるかもしれないが、戦前に単行本で日本の昔話が翻訳されたかどうか、わたしはまだ確認していない。

解放後には、一九五九年に梅韜訳の『日本文間故事』(百花文芸出版社、二十六篇を収める)が出た。わたしの手もとにあるのは、一九六一年に香港の日新書店でそれを複製したものらしいが、これには出典その他なにも記されていない。この二十年後に、さきの坪田譲治の本からの選訳が出たことになる。

その後、関敬吾編の『日本の昔ばなし』(岩波文庫)の訳本が二種類出た。一九八二年には「世間民間文学叢書」の一冊として『日本文間故事選』(中国民間文芸出版社)が出た。巻頭には、関敬吾が本訳書の

ために寄せた序文がある。訳者は金道権、朴敬植、耿金声ほか六人の共訳。金、朴両氏は中央民族学院の教師で朝鮮族の夫妻であり、一九八〇年に本学会の代表団が同学院を訪れたさい、朴氏は通訳を担当した。原書の二百四十篇のうち二百三篇が訳されている。

さらに一九八三年には、おなじ訳名で『日本民間故事選』（上海文芸出版社）が出た。訳者は中国社会科学院研究生院外语教研室の連湘で、北京師範大学の張紫農が校閲をして解説的な前言を寄せている。原書の配列を変更して再構成し、百九篇を抄訳している。このあとで、さきにふれた沖繩の昔話の翻訳が加わったわけである。こう見てくると、関敬吾の『日本の昔ばなし』の訳出は、はじめての鳥瞰的なものとして重要な意味あいを持っていたことがわかる。一九八五年三月、『民間文学』の編集部は、『民間文学の研究手法』をめぐる座談会を開き、そこでの諸氏の発言を同誌五月号にのせた。これにこたえるように、劉守華は『民間文学の比較研究を多面的に展開せよ』と題する文章を発表した（『民間文

学論壇』一九八五年三期）。同年五月、『民間文学論壇』編集部が、「フィールドワークと研究方法」をめぐる座談会を江蘇省南通市で開いた。さらに『民間文学』同年七月号には、昔話の語り手についての三つの

マックス・リュティ著  
小澤俊夫訳

## 『昔話 その美学と人間像』

竹原威滋

本書は、スイスのメルヒェン学者、リュティ氏の原著 (Max Lüthi, *Das Volksmärchen als Dichtung. Ästhetik und Anthropologie*. Disseldorf/Köln: Eugen Diederichs Verlag 1975) の翻訳である。著者については、既にその主著『ヨーロッパの昔話 その形式と本質』（岩崎美術社、小澤俊夫訳）と一般向きに書かれた『昔話の本質』及び『昔話の解釈』（両者とも福音館野村汝訳）が翻訳されているの（『存在』の人も多いかと思う。特に『ヨーロッパの昔話』は、昔話の文芸学的研究法について

文章が特集されている。これらの動きは、中国の口承文芸研究者たちがいまなにを模索しているかを、わたしたちに伝えてくれる。（いいくら・しょうへい／東京都立大学）

知ろうと思えば、どうしても避けて通れない必読文献である。そして今回の『昔話 その美学と人間像』は、いわば、その続編とどういふべきもので、今回も、前者同様、小澤俊夫氏が翻訳を引き受けられたことは、誠に時宜にかなったことだと思ふ。ちなみに、本書は、日本語版と相前後して、英語版 (Max Lüthi, *The Fairytales as art form and portrait of man*. Translated by Jon Erickson. *Bloomington: Indiana University Press* 1984.) も出版されていることを付言しておく。